

## 一 期待と怒りと責任について一

1. 「～しないといけないんだけど、まあええか。」というのは自分を責める否定と自分を許す肯定の二重構造になっています。否定と肯定の比重は10:1であり、相殺されることはありません。「～しなければよかった。」「～しなければならぬ。」も同様です。自分を責めると外からも責められる道筋ができますから、「しなさい。」とか「～してはいけません。」等の指摘を受ける事になります。反省として「～した方がより良い行為だった。」あるいは「～より良い考えだった。」または、「今度からは気を付けよう」と決心して、うまく出来なくてもいつまでもこだわらないで行動に移すことを心掛ければ消化されます。自分を責めることを全く無くしてしまえば他人から責められることはありません。
2. また、自分が他人に指摘している場合は、相手の立場や気持ちを見えしを無視しがちになり、相手がどの様に考えているかも分からないのに、勝手な判断で決めつけた発言となります。この時は敬愛的な思考が欠如しています。原因は支配的な意図を欲していることや、「自分だったら～するのに。」という、自分の領域に相手を入れ込んで自分の正しさの判断を主張するところにあります。しかも怒りの感情が伴っている場合は、現実と理想の矛盾に自分が勝手に苛立っているだけの事を人にぶつけていることを自覚する必要があります。感情の機微が真理なのか間違っているのかを教えてください。個人と個人の間には侵略してはならない領域があり、愛と調和に基づいたところの「全てが自分。あなたは私。私はあなた。」という感覚を体得するまでは、「自分の範囲と他人の範囲」をしっかりと把握しましょう。
3. さらに被害者意識として「～言われた～された。」という考えがあります。これはカルマの法則として、「あなたが人々に対して行うことはあなたに対しても行われる。」という作用によります。実際の行為だけでなく想ったことも同等の現象となります。観察者になると、相手の判断でただ単に言っているだけしているだけの種類と、自分への反作用と、自分が呼び込んだものの区別が出来るようになります。
4. 歪みは事故やケガ、病気、暴力、災害や盗難などの現象化した時点でバランスがとれて消化されます。しかし、「初めに思考ありき」というのが原則ですから、前もってものの見方や考え方を変えるだけで予防でき、好転も加速化されます。ただ、あまりにも過酷な状況にある時は、自らそれを乗り切る使命を自分に課していますので、だめになってしまう、または、とり返しのつかない事になってしまうということは絶対にありません。たとえば、(一度の人生で数回分の転生に値する体験と学習をする場合や、不調和の中での生涯を自ら示すことで、改善の必要性和勇気を他の人に与える役割や、地球に転生をくり返す間に生み出した歪みを自己責任において、一度に全て解消しようと試みる場合など)があります。
5. 「うまく行くはずだったのに」「せつかくしたのに」「言ったはずなのに」などは、自分勝手な過剰な期待であり、ただのわがままです。何事も誠意を持って真剣に取り組めば消化され、「足ることを知る」ことが満足と呼び、満足がさらなる満足と呼び込むという法則に乗りましょう。
6. 世間の価値観でいうところの、「つまらない事」「小さな自分」「むだな事」「失敗した」などは、そう思えるだけで本当はありません。全ては神戻りへの道のりであり、目の前の事はすべて地球全体を超え宇宙全体へと繋がっているからです。たとえば、ひとりの人に親切にしてあげることは全人類にしてあげることであり、部屋を掃除することは地球全体を掃除することに等しいのです。逆に否定や批判も同じ事が言えます。また、自分に値打ちを付けて他人を見下すのは、自分に自信がないから何か優れている点を他人との比較により見い出さなければ生きて行けないという思い込みです。天と自分、創造主と自分を意識すれば浄化されます。
7. 相手に自分にとって都合のよい反応を望むこと(私の言う通りに正しくあって欲しい、私の事を解って欲しい、言わなくても解るだろう)等は、他人を支配・コントロールしようとする意志が働いています。一人一人の個人の魂を尊重して親しみの愛で接する必要があります。自分の一番近くに親しい人と嫌な人を置くという設定により、自分の不調和を改善する仕組みと満足した信頼関係による癒しの効果をもたらす仕組み、自我(わがまま)の発動を明らかにする仕組み等があります。